

Toyo University

FD News

FACULTY DEVELOPMENT

第17号

CONTENTS

～センター長メッセージ～

「大学教育の質向上 ～平成27年度のFD活動を振り返って～」.....p.1

～全学FD研修会・活動報告～

教育改善シンポジウム p.2-3
 ワークショップ「カリキュラム再構築の3つのポイント」..... p.4-5
 英語で授業を行うためのFD研修会（9月開催）.....p.6
 他の部局との共催イベント実施報告
 英語での教授法に関するFDプログラムp.7
 IR室ワークショップp.8

～FD活動紹介～

学内FD活動（平成27年8月～平成28年1月）.....p.8
 各学部・研究科におけるFD活動 Pick Up <経済学部・国際地域学部>p.9
 学生FDチーム活動報告p.10
 学外FD研修参加報告（「実践的FDプログラム」オンデマンド講義）.....p.11

～FD推進支援室からのお知らせ～

他大学との交流p.11
 「関東圏FD連絡会」
 「全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）」
 FD推進センター活動報告（平成27年8月～平成28年1月）.....p.12

「大学教育の質向上 ～平成27年度のFD活動を振り返って～」

副学長 FD推進センター長 神田 雄一

平成27年度私立大学等改革総合支援事業において、「タイプ1」のテーマは「建学の精神を生かした大学教育の質向上」でした。このテーマでは大きく、(1)全学的な教学マネジメント体制の構築、(2)教育の質向上に関するPDCAサイクルの確立および(3)多様な取り組みに関する評価など、全部で22の評価項目が挙げられています。本学では今年度は90/106点の結果でありました。当然ながらFD活動も評価の対象となっておりますが、単に委員会を組織し活動しているといった事象に留まらず、実質的な教育の質的改善や学生の能動的な学修を促進する授業の実施などが求められるようになりました。

大学教育のパラダイム転換の中にあって本学におけるFD活動も第V期（平成27,28年度）に入り、平成27年度は教育の質保証と向上への対応を活動の主眼としました。

学部FD活動状況報告会は、今年度より装いを新たに開催しました。昨年度の活動を振り返るとともに、外部からの刺激を受けることでよりいっそうFD活動におけるPDCAサイクルの確立に繋がります。

本年度においてもFD推進委員会の5つの部会を主体とした活動を展開してまいりましたが、特に、『教員が英語で授業を行うためのFD研修会』、『教育改善シンポジウム』における成績評価とGPAの再考、さらにワークショップ『カリキュラム再構築の3つのポイント』などはこれからの教育改革を踏まえた実践的な

研修会となり、多数の教職員のご参加を得て大変実りあるものとなりました。

また全学共通授業評価アンケートのフィードバックシステムについても検討を進め、授業の質的向上に資する有益な情報となっております。また今年度からは学生FDチーム

の位置付けを明確にしたことにより教職員、学生が三位一体となったFD活動へと進展したと感じております。このような「場」が白山のみならず他のキャンパスにも広がることを期待しております。

また、ここ数年継続的に実施されている新入生アンケートや卒業時アンケートにより、本学学生の特徴、学習状況、大学への要望、さらに課題などがアンケート結果の分析からかなり明確に解ってきました。多様な特徴を有する学生への学修支援などについて、FDの視点からの改善が引き続き望まれます。

本学におけるFD活動もここ数年、学部・学科単位での活動が盛んになってきました。こういった教育の現場に近いところでの活動はその成果も大きく、更なる教育の質の向上が期待されます。

FD活動を今後もさらに充実すべく展開してまいりますので教職員各位の一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。



平成27年度 教育改善シンポジウム 「成績評価の厳格化とGPAの活用について」

教育改善対策部会長 千明 誠（経済学部 准教授）

開催日時：平成27年11月20日（金）16：30～18：20

会場：白山キャンパス 125記念ホール

PROGRAM

1. 開会挨拶
2. 講演「成績評価の厳格化とGPAの活用について」
3. IR室報告
「教育の効果とGPAに関する一考察～卒業時調査の分析から」
4. 質疑応答
5. 総括・閉会挨拶

11月20日（金）16:30～18:20に白山キャンパス（8号館7階125記念ホール）において平成27年度教育改善シンポジウムを開催した。これまで、本シンポジウムは学内の先進的な教育改善の取組みについて議論する場を提供してきたが、今回は、文部科学省による「スーパーグローバル大学創成支援（タイプB）」に本学の構想調書が採択されたことを受けて、国際適用性をもった成績評価の確立に向けた実質的な「成績評価の厳格化とGPAの活用について」というテーマで、議論をする場とした。

当日は、神田雄一FD推進センター長に開催挨拶をいただいた後、名古屋大学高等教育研究センターの夏目達也教授よりご講演をいただいた。主な内容は次のとおりである。

①今日、成績評価の厳格化は政策的に重視される傾向にある。

中教審と教育再生実行会議等による文部科学省の動向や大学基準協会の評価基準を説明した後、成績評価の現状について、成績評価基準の不明確さ、成績評価によるインセンティブの欠如や学生の履修行動に関する問題点が指摘された。

②成績評価の目的は、学生の学修支援と教員の教育実践の改善にある。GPAは成績評価の方法の一つであり、多様な取組みとの併用で教育改善に効果を有する。学生に学修・成績評価に対する責任を求めることで、成績評価は学修支援につながる。

GPA制度について、本来の趣旨、メリット・デメリット、米国における利用方法とその多様な工夫、日本の学部・大学院段階での導入事例の紹介に続いて、導入の際の注意点、導入に連動して必要な条件整備、利用上の注意点（必ずしも学力を精密かつ厳密に反映したものではない、不用意な順位付けに利用される可能性）について説明があり、導入に際しては目的の明確化や他の取組（アドバイザー制やチューター制、CAP制など）との連携が重要である。

平成27年度 教育改善シンポジウム

成績評価の厳格化とGPAの活用について

11月20日（金）16:30～18:20

全教職員対象・事前申込不要 8号館7階 125記念ホール

Program	司会・千明 誠 教育改善対策部会長（経済学部准教授）
開会挨拶(5分)	16:30～16:35 神田 雄一 FD推進センター長・副学長
講演(60分)	16:35～17:35 夏目 達也 氏（名古屋大学高等教育研究センター） 「成績評価の厳格化とGPAの活用について」
報告(20分)	17:35～17:55 劉 文君 東洋大学IR室准教授 「教育の効果とGPAに関する一考察～卒業時調査の分析から」
質疑応答(20分)	17:55～18:15 千明 誠 教育改善対策部会長
総括・閉会挨拶(5分)	18:15～18:20 千明 誠 教育改善対策部会長

Profile

夏目 達也（なつめ たつや）先生
名古屋大学高等教育研究センター一教授
1965年生まれ。文部科学省調査統計企画課専門職員（1990～96年）、北海道教育大学助教授（1996～99年）、東北大学アドミッションセンター教授（1999～2004年）を経て、2004年4月から現職。



名古屋大学 夏目達也教授

③成績評価手法の一つであるルーブリックは、学生に求められる学修行動を具体的に示すことができるというメリットがある。

成績評価のためのヒント（目標達成度による評価、評価対象の明確化・公表、複数の評価方法の利用、評価基準の提示）やテストやルーブリックによる成績評価について説明があった。ルーブリックを利用して求められる学修行動を提示することは、学生の事前対応と振り返りを可能とすることで学修支援につながる。また、テストも1発勝負ではなく複数回実施するなど学修を促す工夫が必要である。



最後に、GPAやルーブリック等を通じて、成績評価に関する伝統的な考え方（教員が学生に宣告する

もの）から新たな考え方（学生と教員が共同で創出するもの）に転換することの重要性が説明され、そのためには、それぞれのメリットと課題を認識した上で、多様な工夫と条件整備が必要であるとした。

次に、本学IR室の劉文君准教授より「教育の効果とGPAに関する一考察—卒業時調査の分析から」として、本学の実態についての報告がなされた。卒業時アンケートの結果とGPAを比較すると、GPAは、①身に付けた能力に関して、教養、専門性、主体性と正の相関があり、コミュニケーション力とは負の相関がみられる。②学部・学科への満足度、就職活動の結果と正の相関がみられる。③満足度や成績評価について学部間でバラつきがみられることが示された。

質疑応答では、成績評価の幅（10点刻み）の狭さや成績評価の国際通用性について質問がなされた。このうち国際通用性に関して、夏目教授より、海外と比較して日本のGPAはより厳格なケースが多いため、現状のままでは、国際的には損をする可能性が高いとの回答があった。最後に、私が総括を述べさせていただき、シンポジウムは終了し



劉文君IR室准教授

た。参加した教職員からも参考になったとの意見が多数寄せられた。今回のシンポジウムを参考として、今後、本学でもGPAの実質的活用について全学的な検討を進める予定である。

参加者の声

会田 富士朗（経営学部 准教授）

平成27年11月20日（金）に教育改善シンポジウムが125記念ホールにて開催された。名古屋大学高等教育研究センターの夏目達也氏による「成績評価の厳格化とGPAの活用について」の講演が行われ、1.教育評価をめぐる政策動向 2.GPA制度とは 3.ナンバリング、カリキュラムマップ 4.成績評価のためのヒント を内容とするものであった。成績評価をめぐる政策動向では、成績評価の厳格化は文部科学省の打ち出す大学の教育改革においても重視されていることが報告された。成績評価をめぐっては、成績評価の基準等の不明確さなど、現状の問題点が指摘された。成績評価の目的は、学生の学修支援と教員の教育実践の改善であるとし、アメリカ等の大学で一般的に行われている成績評価方法の一つであるGPAの紹介がなされた。本学でもす

で導入されているが、本格的な活用はこれからの課題である。GPA制度は、学生の勉学を動機づける一手法であり学生の管理やペナルティーを課するための手法ではないことが強調された。続いてナンバリングのメリット、カリキュラムマップとの関係が説明され、体系的な教育課程の構築に向けたプロセスの中での重要性が強調された。最後に成績評価のためのヒントとして、学修を支援するテストを行うことや評価尺度、評価観点、評価基準などを表形式で示したルーブリックのメリットが紹介された。大変参考になり、充実した講演であった。



全学カリキュラム委員会・FD推進センター共催ワークショップ カリキュラム再構築の3つのポイント ～カリキュラムマップのネクスト・ステージ～

副学長・教務部長・全学カリキュラム委員会委員長・FD推進センター長 神田 雄一（理工学部 教授）

開催日時：平成27年10月17日（土）10：00～16：50

会場：白山キャンパス 125記念ホール

PROGRAM

1. 開会挨拶
2. カリキュラムマップを使ったプレゼンテーション
3. カリキュラムのリ・デザインに関するレクチャーとグループワーク
4. まとめ

教育の質向上のためのカリキュラムマップの作成とその活用は、平成27年度における教育改革の一環として、元教務部長の杉山、岡本両氏から引き継ぎ、推進してまいりました。

平成26年度には「3つのポリシーの検証」から「カリキュラムマップ作成ワークショップ」と繋げ、平成27年度は今後改訂が予定されるカリキュラムを各学部が自主的に可視化していくことに、全学を挙げて挑戦してまいりました。

各学部学科のご尽力により、全学部・学科のカリキュラムマップが完成しましたが、カリキュラムマップを作ることが目的ではありません。今後は、学生をはじめ、各教員がこのカリキュラムマップを活用し、順次的かつ体系的な履修の促進と、カリキュラムの検証とさらなるブラッシュアップ、教育の質的向上へと繋げなければなりません。

このことから、引き続き大阪大学教育学習支援センター佐藤浩章氏をお招きし、カリキュラムマップ評価セミナーを開催し、学部・学科の垣根を越え、互いの良い点、改善点を指摘しあうワークショップを行うことといたしました。

11学部の多くの教員、担当教務課職員、FD推進支援室職員等が参加し、学部・学科の特性を生かし、特に受験生や初年次学生向けに明瞭な説明をする上で、どのようなマップが良いのか、カリキュラムを通じた自己点検を行う良い機会となりました。

なお、検証したカリキュラムマップは、それぞれの学部・学科のカリキュラム委員会等で再度検証し、4月に新入生の手元に届けられる履修要覧に掲載することと、履修指導への活用を各学部をお願い致しました。

今回本学が目指したカリキュラムマップは、ディプロマポリシーと科目の関係性、言い換えれば、各科目のカリキュラムにおける“現住所”を明示することにより、卒業するまでに修得しておくべき能力と授業科目の到達目標との関連性を可視化するものであります。このことは、必要な科目単位を修得し、卒業要件を充たすことにより、学位取得が可能になるという、単位制度の趣旨に沿った授業科目履修制度をよりわかりやすくするひとつの仕掛けであります。

一方、科目ナンバリングは、学問分野と学修段階（難易度）の明示により、学修過程における科目の位置とそのレベルを示すものであります。科目ナンバリングの用途は、学部組織側から見れば、例



大阪大学 佐藤 浩章氏

えば、学問分野ごとの科目数や学習段階（難易度）ごとの科目数、またその履修者、そして平均GPAなどと多角的なデータを用いて検証をすることにより、学生はどの位置の科目を多く履修し、また学習段階の高さに比して、成績評価はどのように変化しているのかについて、多角的な指標から検証することが可能になるでしょう。このことは、カリキュラム改訂を前にした検証に必ずや有効に活用されたいと考えます。

教務担当課の職員の方々は、こうした履修データやカリキュラムのデータを教員と共有することで、より発展的な教職協働によるカリキュラム検証のステージへと進んでいただきたいと思います。

さらに、履修要覧に掲載するカリキュラム表に科目ナンバリングを明示することにより、学生の「学問分野」への体系的な理解を促し、「学習段階（難易度）」に基づく順次的な履修の促進が期待できます。また同様に、留学生に対する、海外との単位互換の促進等にも寄与するでしょう。UMAP（University Mobility in Asia and the Pacific）やISEPItoIのコンソーシアム加盟により、このことは加速的に期待されるものでありますし、単位互換が盛んになることによって、本学のカリキュラムの国際通用性が増大されています。

およそ2年を掛けたこの全学的な大きな取り組みが同時に成し

えたことは、教職員皆様のカリキュラムに対する意識の高さにご尽力の賜物であります。心より御礼申し上げます。



参加者の声

高木 英行(法学部 准教授)

法学部では、カリキュラムマップ（以下「マップ」）作成に当たり、主に三つの目標を掲げた。①法律学の体系的学習の必要性を明らかにする。②学生が一目で見て分かりやすいものにする。③ディプロマポリシー（以下「DP」）との関係を明示する。

当初、法学部では①が重視された。しかし全学カリキュラムマップ評価セミナー（以下「セミナー」）を通じ、②と③の重要性が再認識された。

筆者がセミナーに参加し特に印象に残ったのは、基調講演の中で、他大学ではロールプレイングゲームのようなデザインでマップを作成し、②に対応しているとお話である。斬新な発想だと感心した。筆者の参加したグループディスカッションの中でも、カラー刷りマップ作成など、学部学科ごとの創意工夫がうかがい、大変勉強になった。筆者以外の法学部からの参加教員も、セミナーから大きな刺激を受けていた。

そこで法学部では、改めてマップの再検討作業に着手した。特に法律学科のマップに関しては、①を基本としつつも、②を踏まえて「憲法」、「公法分野」、「私法分野」という大枠を明示した。また③を踏まえ、各科目上に DP との関連を丁寧に明示した。その結果、かなり充実し、見やすい内容になったと思う。

しかし同時に、個人的な見解だが、完成されたマップからでは、「進路との関連」が見えてこない。法学部の課外講座（公務員試験対策講座等）とのリンクを含め、学生の進路意欲を刺激するようなマップ作成が、今後の課題ではないかと考える。

学部学科	1年次前期	1年次後期	2年次前期	2年次後期	3年次前期	3年次後期	4年次前期	4年次後期
法学部	憲法	行政法	民法	刑法	労働法	国際法	法政学	法政学
法律学科	憲法	行政法	民法	刑法	労働法	国際法	法政学	法政学
3年	憲法	行政法	民法	刑法	労働法	国際法	法政学	法政学
2年	憲法	行政法	民法	刑法	労働法	国際法	法政学	法政学
1年	憲法	行政法	民法	刑法	労働法	国際法	法政学	法政学

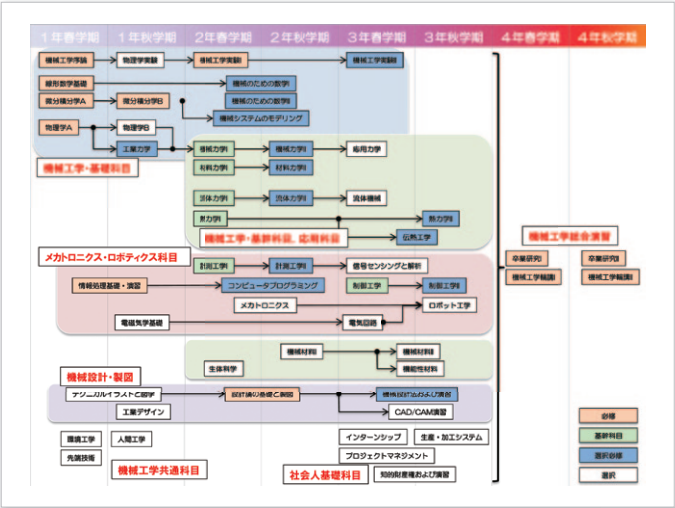
ワークショップ時の法学部法律学科のカリキュラムマップ

参加者の声

松元 明弘(理工学部 教授)

平成 26 年度・27 年度と続けて、カリキュラムマップのセミナーに参加した。平成 26 年度のセミナーにおいて、自学科のマップを試行錯誤しながら作成したのだが、他学部他学科のマップと比較してみて、マップの違いから学問の方法論の違いを確認できた。その時はマップの作成で手一杯であったが、今年度のセミナーでは他分野の人に自学科の説明をすることで、自学科のカリキュラムを客観視することを求められた。過去に教務委員、入試委員、学科長を経験し、現在就職委員を担当しているので、学科説明をすること自体は慣れているとはいえ、他学科との関連づけや比較をしながら自学科の特徴を説明することの必要性を改めて痛感した。

私の所属する理工学部機械工学科は、例示されたものの中では物理学科のカリキュラムマップのまとめ方に近い。基本的に「積み上げ方式」なので時系列情報を明示せざるを得ず、一方で、科目名を線でつないで内容の関連も示そうとして、その両立には苦労した。ディプロマポリシーとの関連を示すことも容易ではなかった。ただしその結果、基礎があっても応用がわかりにくい科目、他の科目との関連の薄い科目の存在などの課題を顕在化させることができ、こういった活動の意義を理解した。他学部他学科のフィロソフィーに触れることもでき、こういった活動を継続的に実施することで総合大学の価値をより高めることができるであろうと確信した。



ワークショップ時の理工学部機械工学科のカリキュラムマップ

英語で授業を行うためのFD研修会(9月開催) 「英語による講義とプレゼンテーション」

開催日時：平成27年9月14日(月) 10:00~17:10

会場：白山キャンパス 8号館2階8204教室

講師：BRITISH COUNCIL専任英語講師

PROGRAM

1. 「準備と構成」

学習するスキル：アイデアを準備する・適性を判断する・論理的な構成

2. 「一貫性」

学習するスキル：効果的な始め方・つなぎ言葉・まとめと終わり方・質疑応答

3. 「ビジュアルを使う」

学習するスキル：ビジュアルを使う際のガイドライン・ビジュアルを参照する・複雑なデータを説明する

4. 「実際に行う」

学習するスキル：強調表現やイントネーションを使う・ボディランゲージを使う・メモを使う

平成27年9月14日(月)に「英語で授業を行うためのFD研修会」を開催した。昨年度3月にも同様のプログラムで研修会を実施したが、満足度の高い声が多く寄せられたことから、今年度もブリティッシュ・カウンシルよりネイティブの専任講師を派遣いただき、9月と3月の2回にわたり「英語による講義とプレゼンテーション」をメインテーマとして研修会を開催した。

9月に開催した研修では、講師はもちろんのこと参加者も英語のみを使用し、参加者からは積極的に質問や意見が述べられた。研修会終了後のアンケートでは、「実践的な内容で参考になった」「機材の使い方やジェスチャーの使い方なども含めて、非常に参考になった」「他の先生方とも交流できたのがよかった」など高い評価が寄せられ、本研修会に参加した動機については、「いずれ英語で講義を行うことが予想されるため」との回答が大部分を占め、グローバル化に向けた授業改善についてそれぞれの教員が意識をもって参加していることがわかった。

参加者の声

山口 しのぶ(文学部 教授)

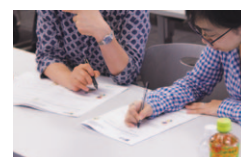
平成27年9月14日午前10時から午後5時10分まで、本学白山キャンパスで開催された「英語で授業を行うためのFD研修会」に参加した。ブリティッシュ・カウンシルのネイティブ講師の方により研修を進められ、7学部10学科から12名の専任教員が参加した。研修会においては、まず参加者が隣同士英語で自己紹介した後、講師が授業を行うにあたって考慮すべき点について参加者に問いかけた。それに対



して参加者は隣同士で話し合い、学生の人数、知識やモチベーションの度合い等基本的な事項を確認した。その後イントロから本題、結論、そしてディスカッションにいたるまで、授業の大まかな組み立て

方について学んだ。昼食をはさんで午後からは、「hook」と呼ばれる学生を引き付ける話題づくりの方法、次の話題につなげるsignpostingの表現、質問への対応、パワーポイントの活用等、より実践的なスキルを学んだ。最後には、今回学んだ内容を踏

まえ、自由テーマで参加者各自が英語で4分間の発表を行った。さまざまな学部学科の教員が異なるバックグラウンドで行うプレゼンテーションは大変興味深く、また自身の英語力やプレゼンテーション力を振り返る良い機会ともなった。今回の研修は英語のみ使用したが、講師のおかげもあり終始楽しい雰囲気で、あっという間に時間が過ぎた。次年度予定する英語での授業の際にも、まず学生が英語での授業に参加しやすい明るい雰囲気を作り、その上で今回学んだ授業の組み立て方や各々のスキルを実践していければと考えている。



国際連携本部事務課・FD推進センター共催

東洋大学
TOYO UNIVERSITY

UCLA Extension

英語での教授法に関するFDプログラム

開催日時：[Session1] 平成 27 年 9 月 1 日(火)～3 日(木)
 [Session2] 平成 27 年 9 月 4 日(金)～6 日(日)
 各日 10:00～17:00

会 場：白山キャンパス 5309教室

参加人数：[Session1] 22 名、[Session2] 16 名

PROGRAM

- 1日目** 英語を求めるグローバルな潮流
 グローバルなコミュニケーション媒体としての英語、
 「共同責任」としてのアカデミック・リテラシー
- 2日目** 理論的基礎：学生参加型教育の実施、
 コンテンツから言語を学ぶ
- 3日目** 実践編：語学とコンテンツ学習の統合、
 言語修得のための大学教員の役割

平成 27 年 9 月 1 日(火)～3 日(木)(Session1)、9 月 4 日(金)～6 日(日)(Session2) の各 3 日間、白山キャンパスにて、英語での教授法や学生参加型の授業の計画や手法について学ぶ「英語での教授法に関する FD プログラム」が国際連携本部事務

課主催、FD 推進センター共催で開催された。

本プログラムは、本学のスーパーグローバル大学創成支援の取組の一環として、アメリカの UCLA Extension の協力のもと、第二言語としての英語教育に関する第一人者であり、教育コンサルタントとして世界的に活躍している Donna M.Brinton 教授を講師としてお招きして実施された。3 日間のプログラムでは、英語で授業を進める上で、学生参加型の授業運営をする意義と様々な事例紹介や、インタラクティブな指導方法について教授され、全てのプログラムに出席した方には UCLA Extension の公式修了証が授与された。



講師の Ms. Donna M. Brinton

今回は、2 つの Session で参加いただいた計 38 名のうち、15 名は他大学からの参加者であった。参加者の声から講師の Brinton 教授による研修内容のレベルの高さを改めて実感すると共に、英語教授法への社会的な関心の高さも窺える研修であった。

なお、8 月 29 日(月)～30 日(火)には、中学・高校の英語教員向けの 2 日間の FD プログラムも開講され、附属校から 8 名の英語教師が参加した。

参加者の声

清水 文一(生命科学部 教授)

夏の暑さも冷めやらぬ9月の白山キャンパスで開催された東洋大学・UCLA Extension共同実施「英語での教授法に関するFDプログラム」(9月1日～3日)に参加した。22名の参加者の中には、東洋大学以外からも遠くは熊本大学、岡山大学からの参加もあり、国内の大学講義の英語化への意識の高まりを感じた。



講師はDonna M. Brinton 先生で、非常に話しやすい方であった。アメリカという多言語、多文化社会で使われるコミュニケーション道具としての英語の重要性に始まり、それを使った教育法、さらには教育目標の立て方などを、先生のこれまでの経験に即してレクチャーを受けた。



アメリカはその活力を移民の受け入れで培ってきた。いかに移民を受け入れるのかを

試行錯誤してきた歴史がアメリカにはある。大学もその取組の中でまさに走りながら教育法を考え体系化してきた。Brinton 先生が熱く語られた英語による教育とは、多文化・多言語が渦

巻くるつばに、大学という教育機関が飛び込んだ中で最適化した教育の形なのであろう。そこには研ぎ澄まされた凄みがあった。Brinton先生の人当たりの良さはこの辺の修羅場を多くくぐられた経験に裏打ちされているのかもしれない。

本講義で行われたグループディスカッションで他学部の先生たちと交流できたことは、私にとって良い経験であった。そこではある課題に対してディスカッションし、その中から新しいものを見つける手法を経験した。試験管の中の試料から得られるデータと向き合ってきた私にとってこれは新鮮であった。このような機会も一種の異文化コミュニケーションだったかもしれない。私のつたない英語での議論にお付き合いいただいた皆様にこの場を借りて感謝したい。

～参加者のアンケートから(抜粋)～

※日本語訳

- 他の教授との議論から多くのことを知った。英語指導法を強化することができ、英語指導と英語学習に関する多くの考え方を収集することができた。
- すべてが素晴らしかった。とてもエキサイティングなクラスだった。
- Donnaは間違いなくプロフェッショナルだ！私は彼女から授業を受けたことを誇りに思う。
- 私はこのプログラムをとっても楽しんだ。もしこのようなコースを再び提供してくれるのならば、是非参加したいと思う。
- 講師が当該分野の最も素晴らしいエキスパートであるので、私たちは効果的に学ぶことができた。

東洋大学IR室・FD推進センター共催

IR室ワークショップ～米国高等教育における学習成果の診断

開催日時：平成27年11月19日（木）10：30～12：00

会場：白山キャンパス 8203教室

講師：本田 寛輔

（米国メイン州立大学 オーガスタ校 学習成果の診断、准部門長）

アメリカの高等教育事情や Evaluation（評価）と Assessment（診断）および IR との違いなどをふまえ、メイン州立大学オーガスタ校における取組事例について、講演いただいた。

1) GPA の活用事例①

同校では GPA を活用して難関科目(Barrier Course)を特定し、学科内での議論を促す取り組みを行った。まず、直近3学期間の各科目の履修者数および単位取得者数から、単位取得率を割り出し、難関科目を特定する。（平均は75%だが、低いと50%程度のものがある。）それらの科目について、どこに問題があり、それをどう解決するか、学科長に検討を依頼する。（副学長と学科長が面談する機会が年2回あり、その場で依頼する。）具体的な難関科目としては、1年次の科目（リメディアル教育が不十分）、大人数科目（教員のフォローが行き届いていない）、3年次専門課程スタート時の科目（基盤と専門のつながりが悪い、カリキュラム・科目配置の問題）、非常勤講師担当科目等があった。3



講師の本田氏

年後に同様の調査を行い、学科ごとにおける対応の効果を検証する予定である。

2) GPA の活用事例②

1) への対応策として、特別予算を措置し、担当教員のほかに学習コーチを配置した授業があった。その効果測定を履修者の GPA により行った。結果、前年度より、W（レポート未提出のため不可）の学生が減り、D（可）の学生が増えていた。ただし、GPA はあくまで結果でしかないので、その過程について評価すべく、現在、担当教員と学習コーチにヒアリングを行っている。

3) カリキュラムマップの活用事例

通常は、どの科目において、どの能力が、どの程度教えられているかを一表にまとめ、科目の位置づけを明らかにするものだが、科目の位置づけはコースナンバーである程度把握できるため、上記の要素に、「どのような手段で」という要素を付け加えたカリキュラムマップを作成した。（例：D＝ディスカッション、P＝ペーパー・小論文、Q＝クイズ・質問形式）それにより、誰がどこで何をやっているかを可視化できた。

カリキュラムマップがFDになるか、やっつけのコンプライアンスに終わってしまうかは、学科内での議論がキーとなる。学科長が一人で作成したり、逆に個々の教員が自分の担当科目のみを埋めていったのでは後者になってしまう。教育改善のきっかけとするために、学科内での議論を促す工夫が必要である。



学内FD活動

各学部等の主なFD活動一覧（平成27年8月～平成28年2月）

9月9日	FD講演会「ソーシャルメディアのリスク-予防と対策-」（食環境科学部・生命科学部・生命科学研究科共催）	平成28年 1月7日(木)・ 14日(木)	「PowerPoint+音声で作成できる授業用教材 動画コンテンツ作成講座・座談会」 (理工学部・総合情報学部)
10月13日(火)	FD講演会「アカデミックハラスメント防止講演会」 (法学研究科)	1月8日(金)	FD研修会「“体験”を“経験”に変える学びの手法～ キャリアを切り拓く力とは～」(国際地域学部)
11月12日(木)	FD講演会「ライト・アクティブラーニング ～ヒントとしての橋本メソッド」(経済学部)	1月12日(火)	全体FD会議(法科大学院)
	経済学部生との意見交換会 「学生から見た学修時間の確保について」(経済学部)	1月12日(火) ～15日(金)	教員相互の授業参観(法学研究科)
	FD講演会「グローバル化に対応した理工学部 人材育成とアクティブ・ラーニング」(理工学部)	2月2日(火)	FD研修会「英語で授業を行うための研修会」(理工学部)
12月7日(月)	FD講演会「大学生のメンタルヘルス –こころの 問題を中心に-」(生命科学部・食環境科学部)	2月12日(金)	FD講演会「学生の英語プレゼンテーションの指導に ついて」(生命科学研究科)
	FD講演会「学生参加型授業の実践～多様性が活きる 学びを目指して」(社会学部)		FD研修会「英語で授業を行うためのFD研修会」 (ライフデザイン学部)
12月15日(火)	全体FD会議(法科大学院)	2月17日(水)	FD研修会「ToyoNet-Aceを利用した発展的な授業 を行うための研修会」(ライフデザイン学部)

各学部・研究科におけるFD活動Pick Up

経済学部FD講演会

「ライト・アクティブラーニング～ヒントとしての橋本メソッド～」

吉田 明子(経済学部 教授)

11月19日(木)に富山大学(教育・学生支援機構)の橋本勝教授をお招きしてFD講演会「ライト・アクティブラーニング～ヒントとしての橋本メソッド～」が開催された。内容としては、1) アクティブラーニング(学習者が能動的に学ぶ)の意義、2) 橋本先生の実践内容(橋本メソッド)の紹介、の2つに分けられる。



講師の橋本氏

アクティブラーニングについては、ゼミや初年次教育だけでなく、むしろ(多様な学生が集まる)多人数講義でこそ、その良さを生かしていくことにより学修効果が高まる。また、いわゆるディープ・ラーニングを目指すよりも、むしろライト(light, write, right)に学生も教員も楽しくアクティブラーニングを行うべき、という趣旨であった。

橋本メソッドについては、おおむね次のような内容であった。多人数講義(120～130名が適当)において(1)学生は3、4名のチームを作り、与えられた中からテーマを選ぶ。

(2) テーマについてレジュメを作成して提出するが、教員が選抜したチームのみが発表できる(競争原理の導入)。

(3) 発表当日は、フロアの学生からの質問や、それに対する応答も、すべて評価の対象となる(学生達にも事前に周知)。

実際の講義風景の写真では笑顔で挙手(質問のため)している学生が多く、しかけ(?)を伺ったところ、初期の段階で「何を話してもいい」雰囲気作りをすること、とのことだった。その他、シャトルシートの活用や講義時の教員の立ち位置など、細かなところで有益な示唆をいただくことができた。



国際地域学部FD研修会

「“体験”を“経験”に変える学びの手法～キャリアを切り拓く力とは～」

子島進(国際地域学部 教授)

2016年1月8日(金) 15:00～17:30に「“体験”を“経験”に変える学びの手法～キャリアを切り拓く力とは～」というテーマのもと、(株)イービーシーエデュケーション チーフコンサルタントの山本みどり氏をお招きし、国際地域学部FD研修会を開催した。



今回の研修会は、学部内委員会や自己点検・評価活動等を通して見えてきた本学部の傾向や今後の課題を踏まえて企画・実施された。すなわち、国際地域学部の学生たちは、まちづくりや国際協力分野の課題解決型の取り組み(ゼミ、フィールドワーク)や国内外の体験学習・研修等に積極的に参加するようになってきた。しかしながら、そこでの学びや成長を自ら十分に理解しておらず、結果として就職活動の場でも説得力あるアピールをできずにいるのではないかと懸念である。

現場での学修を単発的な体験で終わらせず、自らのキャリアを切り拓いていける「価値ある経験」へと発展させていくことの重要性が、今後の課題として浮かび上がっているのである。そして、日頃の授業やゼミを通じてこの課題を乗り越えるためには、その方法論を我々教員が学び、仕掛けや工夫をみなで検討・共有していく必要があるとの結論が、担当教員間の議論から導き出された。

以上の問題意識に沿って、講師の山本氏とも事前の打ち合わせで課題を共有し、そのうえでオリジナルのワークショップ形式で研修を実施することにした。当日は、ゼミや体験学習で実

際に行っている活動内容を題材にした。そして、実際の就職活動における面接では、どのような形でこれらの体験学習が問われているのか、採用企業側からの評価ポイントを交えて体感した。さらに、効果的な指導を展開するためのコーチング方法を実践的に学んだ。

一連の議論を受けて、山本氏からは、以下のようなアドバイスがあった。

- ・ゼミ活動等における「課題設定」において、自己選択意識を持たせる工夫が必要。
- ・活動成果報告を、複数のゼミで行ったり、他大と交流するなど「改まった場」におけるプレゼンテーションの重要性。ゼミ外の教員や学生同士と質疑応答やフィードバックを行うことで、意義ある経験へと認識が深まる。同時に、他者に自分自身の経験をより論理的に語れるようになる。

参加した教職員約30名で様々なアイディアを出し合って共有するなど、活気のある研修会となった。社会で求められる力を、ゼミ活動や学部教育プログラムの中でいかに養うかについての議論の入り口

に立つことができたと感じている。今後は「体験を経験に転換させるための方法論」を、ゼミの到達目標や成績評価一に組み込んでいくことになろう。来年度いっぱい時間をかけて、教員間のコンセンサスを醸成していくことが、学部の基本的な方針である。



学生FDチーム活動報告

経済学部2部経済学科1年 上地 冬哉
国際地域学部国際地域学科1年 梶平 建貴

「学生FDサミット 2015夏」へ参加

9月に追手門学院大学で行われた「学生FDサミット 2015夏」に参加しました。学生FDサミットは、全国の大学から学生FD活動に携わる学生が参加する大きなイベントで、今回は全国64大学から418名の参加がありました。



発表の様子

初日の他団体による事例紹介や、他大学の学生・教職員の方々とのおしゃべり場を通して、最終日には今後の活動で活かしてみたいことを学生FDチーム内で共有しました。

サミットへの参加は、改めて学生FD活動というものを考える良い機会になりました。



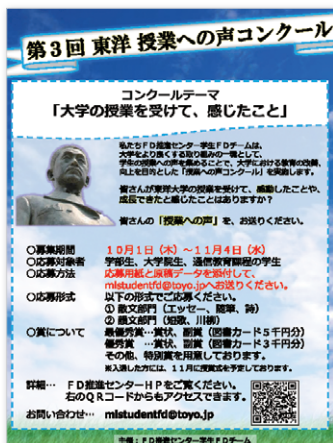
第3回「東洋授業の声コンクール」を実施

10月から11月にかけて第3回「東洋授業の声コンクール」を開催しました。今年度は学生が授業から感じた様々な想いを集められるよう、「大学の授業を受けて、感じたこと」というテーマで、学生からの作品を募集しました。応募された作品はどれも素晴らしく、この企画を通して、学生が授業というものをどのように考えているのかを知ることができました。



表彰式の様子

各部門の入賞作品はニュースレターとHPにて公開していますのでぜひご覧いただければ幸いです。



作品募集のポスター

「先輩たちによるおもしろ授業紹介冊子 WiLL」刊行予定!

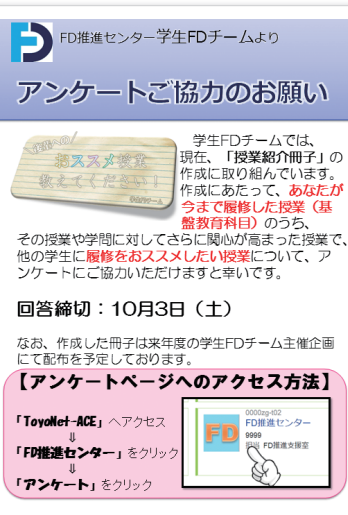
現在、新入生に向けた授業紹介冊子「先輩たちによるおもしろ授業紹介冊子 WiLL」の刊行に向けて活動を進めています。白山キャンパスの2万人の学生を対象に、「学生履修をしてみその授業や学問に対さら興味関心が高まった授業、他の学生に履修をおすすめしたい授業」についてアンケートを行いました。アンケートには約190件の回答があり、寄せられた声をもとにいくつかの授業をピックアップして、担当教員の先生方にインタビューを行い、アンケート結果やインタビュー内容をもとに、現在記事のまとめを行っています。



教員へインタビューをする様子

2016年4月1日に刊行予定ですので、完成した際には、ぜひご覧ください。

今後も教職員の方々と協力しながら、学生がより主体的に学習に取り組んでいけるよう、色々な角度から活動に取り組んでいきたいと思います。



学生へのアンケート実施ポスター

学外FD研修会参加報告 （「実践的FDプログラム」オンデマンド講義）

丸山 晃(社会学部 助教(実習担当))

学外のFD研修の参加については会場に赴いて受講する形式が多いが、私が参加した研修「実践的FDプログラムオンデマンド講義」(全国私立大学FD連携フォーラム)は、インターネットを通して配信されている映像講義を通して受講するものである。

プログラムは「教育」「研究」「管理運営」の3領域があり、分野についても高等教育論、授業設計論、教育評価、心理学、研究者概論、大学管理運営、FD概論等、多様なプログラムがある。また、新任教職員から管理職教職員までの対応レベルが設定され、合計で37本も準備されていた。

このFD研修のメリットは、なんといっても自宅のPCやタブレット等を通して自分の時間で受講できることであった。また、当初は大学における授業設計について受講するつもりであったが、それだけでなく初年次教育のあり方や発達障がい

ある学生の支援方法、大学の国際化等高等教育における課題など、多様なテーマを自由に選択して受講できたことである。研修自体は、インターネット上に準備されているレジメ等の資料をダウンロードし講義映像を通して受講するものであるため、双方向性には欠けるが、自分の理解に合わせて止めたり、再度視聴することも可能である。

加えて、本学でも導入されているmanabaシステムを使って受講するため、教育場面でのmanabaの展開方法についても受講生の側から体験することができた。

なお、大学職員向けのテーマも設定されており、教員だけでなく職員のSDにも活用できると感じた。多くの教職員に活用できる研修であるだろう。



他大学との交流

「関東圏FD連絡会」

第19回

日時：2015年11月25日(水)

場所：法政大学 市ヶ谷キャンパス 新一口坂校舎501教室

平成21年度より青山学院大学、法政大学、立教大学、東洋大学のFD担当者が集まり、同規模の私立大学が抱えるFD活動の問題解決と情報収集を目的とした意見交換会を開催しております。第18回連絡会の議事により、今回から新たに國學院大学が加わり、計5大学による、新たな体制での意見交換がなされることになりました。

法政大学で行われた第19回関東圏FD連絡会では、國學院大学教育開発推進機構長の柴崎氏をはじめとした参加者からご挨拶をいただき、その後、特に授業改善アンケートのWeb化、結果データの学生へのフィードバック等について、既に導入している大学と導入を検討している大学との活発な情報交換がなされました。本学においてもこれらのトピックについては検討を要することから、参考となる情報を得ることができました。

今後は新たに加わった國學院大学のみならず、各大学との連携をより深めるとともに、本学のFD活動の改善・発展に努めて参ります。

「全国私立大学FD連携フォーラム(JPFF)」

2015年12月21日(月)に「2015年度全国私立大学連FD連携フォーラム」の会員校ミーティング・懇談会が立命館大学東京キャンパスにて開催されました。今回は加盟する全国34大学のうち、25大学34名が参加し、関西会場(立命館大学)とは映像配信による開催形式がとられました。特に懇談会では、グループディスカッション形式による各大学の情報共有がなされました。近年は「FD」は非常に広義に捉える大学が多く、「初年次教育、教養教育のありかた」や、「障がい学生支援」をはじめとした学生支援に係ることなど、ディスカッションにおけるトピックも非常に多岐にわたるものでした。こうした多様な情報の交換を重ね、本学におけるFD活動と有機的に結びつけることで、さらなるFD活動の推進に役立てていきたいと思っております。

FD推進センター活動報告(平成27年8月～平成28年1月)

FD推進委員会

◆平成27年度第4回

●日時：平成27年9月17日(木) 10:00～12:00

報告1 各部会活動状況報告

報告2 センター長報告

- ①学生FDチーム活動報告(学生FDサミット2015夏 於:追手門学院大学)
- ②国際連携本部事務課とのUCLAによる 英語FDプログラムの共催について
- ③カリキュラム・マップ評価セミナーの開催(10/17)について

審議1 教育改善シンポジウムの開催について

審議2 学生FDチーム 授業紹介冊子の作成について

協議1 一般教員FD研修会の開催について

◆平成27年度第5回

●日時：平成28年1月23日(土) 10:00～12:00

報告1 各部会活動状況報告

報告2 センター長報告

- ①カリキュラム・マップ評価セミナーの開催(10/17)について
- ②関東圏FD連絡会(11/25)について
- ③全国私立大学FD連携フォーラム(12/21)について
- ④シラバス点検セミナー(1/29)の開催について

審議1 一般教員FD研修会の実施について

審議2 新任教員FD研修会(第2回)の実施について

審議3 TA研修会の実施について

協議2 英語で授業を行うためのFD研修会について

協議3 平成27年度FD推進委員会の活動の振り返りと課題の抽出

研修部会

◆第4回(メール会議)

●日時：平成27年9月4日(金)

課題1 平成27年度「一般教員FD研修会」の開催における実施方針について

◆第5回(メール会議)

●日時：平成27年12月22日(火)

課題1 平成27年度「一般教員FD研修会」企画内容について

課題2 平成28年度「TA研修会」開催概要について

大学院部会

◆第3回(メール会議)

●日時：平成27年11月6日(金)

課題1 各研究科作成、研究指導計画・修士論文審査基準の確認について

課題2 シラバスの作成要領、チェック基準の作成について(意見集約)

◆第4回(メール会議)

●日時：平成27年12月2日(水)

課題1 「研究指導」のシラバスの取り扱いについて

教育改善対策部会

◆第2回(メール会議)

●日時：平成27年9月8日(火)

課題1 平成27年度教育改善シンポジウムの開催について

課題2 学生FDチームの授業紹介冊子の作成について

授業評価手法検討部会

◆第2回

●日時：平成28年11月26日(木)

報告1 授業評価アンケートの経年比較について

報告2 平成27年度秋学期授業評価アンケート実施方法の一部変更について

審議1 授業評価アンケート結果表の一部修正について

審議2 自由記述結果一覧データの納品について

審議3 授業評価アンケート結果の学生への情報公開トライアルについて

審議4 平成28年度授業評価アンケートWeb実施トライアルについて

編集部会

◆第2回(メール会議)

●日時：平成27年11月30日(月)

課題1 「平成27年度FDニュース第17号」におけるページ構成等について

学内公開活動(FD推進センター主催のみ)

英語で授業を行うためのFD研修(1回目)

●開催日時：平成27年9月4日(月)10:00～17:10

●会場：8204教室(白山キャンパス)

●参加対象：全教職員(12名定員)

●参加人数：12名

平成27年度教育改善シンポジウム

●開催日時：平成27年11月20日(金)16:30～18:20

●会場：125記念ホール(白山キャンパス)

●参加対象：全教職員(非常勤講師を含む)

●参加人数：約40名

●テーマ：成績評価の厳格化とGPAの活用について